

平安期における「星」の展開

——後冷泉朝の散文作品群を中心に——

大塚 誠也

平安期以前の星に関する記述は、天文異変や宿曜に関するもの、及び七夕伝承がほとんどである¹⁾。星を景物のように、すなわち花や月のように記述することは一般的でなかったのだろうか。景物としての星に関する本格的な議論は、管見の限り院政期の肥後(常陸)や中世初期の建礼門院右京大夫を待たねばならない²⁾。

しかし、平安期以前の作品群を通覧すると、多くはないが星を景物のように見なし、記述したとおぼしい箇所が複数確認できる。従来、星といえは『建礼門院右京大夫集』二五二歌の「月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを今宵知りぬる」のみが突出して有名であったが、それ以前の星に関する記述や修辭に、注目すべき点はないのだろうか。この問題を論じることにより、星の表現史の一端が明らかとなるだろう。

本稿は散文、和歌、漢籍の用例を総体的に調査し検討する一方で、一一世紀後半の後冷泉朝の散文作品群を議論の中心に据える。『狭衣物語』や『更級日記』等が、直前の文芸をいかに受容し、展開させたかという問題を軸にしながら、星の表現史を論じる。星の用例は上代から確認できるが、通史的にそれらを検討すると、この時代に注目すべき用例群がまとまって見受けられるのである。本稿三節で具体的に見るが、景物として看過されがちであった星が、「光」という観点から同時多発的に捉え直されたのがこの時代とおぼしい。

たしかに、後冷泉朝は『源氏物語』の模倣というイメージが根強くある。ただ一方で、関白藤原頼通等の文化政策や、物語歌合等の特質が近年究明されつつあり³⁾、文学史を考える上で決して軽視すべきでない時代でもある。

本稿は以下、遺漏なく議論を進めるため、煩雑であるが上代から用例を通覧する。時系列に沿って星の用例を確認していき、各時期及び各作品の特徴をおさえる。この作業を通じて、星に関する表現がどのように展開していったのかを見ていく。なお、散文の用例と和歌の用例とで傾向が大きく分かれるため、『万葉集』以外の和歌作品は、便宜のため後半の四節でまとめて扱うこととする。加えて、五節で漢籍に触れる。

一 平安中期以前の天象

星の用例は上代から見受けられるが、景物や修辞という側面はとぼしい。原則として天文異変とその記録がほとんどである。『日本書紀』の後半に頻出する「六年の秋八月に、長星、南方に見ゆ。時人、彗星と曰ふ。七年の春三月に、彗星廻りて東に見ゆ。」(舒明天皇③四四頁)等や『日本霊異記』の「冬の十一月八日乙巳の夜に、戌の時より寅の時に至るまで、天の星悉くに動き、續粉ひ飛び遷りき」(三五五頁)も類例である。これらは中国の史書に倣ったものであり、星が凶兆として観測される例である。

ただ、例外的な用例もいくつか存在する。『日本書紀』の「河の石の昇りて星辰に為るに及るを除きて」(仲哀天皇①

四二九頁)は決して起こらないことの喩えであり、同書の「風雨隙より入りて、衣・被を沾す。星辰壞より漏りて、床・蓐を露にす」(仁徳天皇②三三三頁)は荒廢した宮城内を星明かりが照らすという描写である。後者は場面描写として機能しているが、荒廢の様子であり、景物や賞美といった意識は認めがたいだろう。

他にあえて挙げれば、『日本書紀』の「星神香香背男」(①一一九頁)というまつろわぬ星神や、『播磨国風土記』の「二つの星」(四七頁)という隕石、『丹後国風土記』逸文の筒川の嶼子の「昴星」「畢星」(四七六頁)という童が見える。

つぎに『万葉集』だが、七夕の「ひこほしはたなばたつめとあめつちのわかれしときゆいなむしろ……」(旧一五二〇)や明星の「……あかほしのあくるあしたは……ゆふつづのゆふへになれば……」(旧九〇四)等が登場し始める。七夕は以後『古今集』や『蜻蛉日記』等、様々な作品に用例が確認できるようになる。七夕は伝承であり、星を鑑賞する年中行事でもあるが、他の星の用例と異なり、男女の逢瀬や天の川の修辭がほとんどである。七夕はいわば七夕固有の表現史を有しているため、本稿では網羅的に掲げず論旨に関わるものを引用する。この措置により論述に支障がでることはないため、諒とされたい。

また『万葉集』では景物としての他の用例も確認できる。

「きたやまにたなびくくものあをくものほしはなれゆきつきをはなれて」(旧一六一)は、天武天皇の挽歌において空高い星を描写し、死者との隔絶が寓されてもいる。「あめのうみにくものなみたちつきのふねほしのはやしにこぎかくるみゆ」(旧一〇六八)は多くの星を「ほしのはやし」と表現しており、いわゆる景物となつているといえよう。

『万葉集』の星は、概して七夕や明星等の特定の天象がほとんどであるが、右のように一般的な星が景物として詠まれるケースも若干確認できる。

最後に『うつほ物語』だが、弾琴と天変地異の場面において星の描写が複数確認できる。

A 『うつほ物語』吹上下

……涼は弥行が琴を、少しねたう仕うまつるに、雲の上より響き、地の下よりとよみ、風雲動きて、月星騒ぐ。礫のような氷降り、雷鳴り閃く。(①五三三頁)

他に、七月七日の七夕に「星ども騒ぎて、神鳴らむずるやうにて」(③五五〇頁)、「月の巡りに星集まるめり」(同頁)、「月、星、雲も騒がしくて」(③五五一頁)、「八月一五日の仲秋の名月に「星騒ぎ、空の気色、恐ろしげにはあらで」(③五九五頁)が確認できる。前者は他作品の七夕の場面と違い、年中行事や伝説と一線を画する描写がなされている⁴⁾。

いずれも先に見た上代の天文異変に通じるが、先行研究では奇瑞と称されることが多い。これらは景物とは見なしたがたいが、星を描いた平安中期の用例として注目される。後に検討する『源氏物語』や『狭衣物語』にも影響が見られる。以上、上代から平安中期の『うつほ物語』までの星を確認した。景物や賞美に関する用例は僅少であり、天文ないしは異変といった特定の文脈に置かれる例がほとんどであった。

二 『枕草子』『源氏物語』の転換期

一条朝の『枕草子』『源氏物語』を見る。この二作品は後代への影響が多く指摘されており⁵⁾、後冷泉朝を考える上でも十分な検討が必要となるう。

まず『枕草子』だが、つぎの二章段が挙げられる。

B 『枕草子』正月一日、三月三日は

正月一日、三月三日はいとうららかなる。五月五日は、曇りくらしたる。七月七日は、曇りくらして、夕方は晴れたる空に、月いと明かく、星の数も見えたる。(四三三頁)

C 『枕草子』星は

星は、すばる。彦星、夕づつ。よばひ星すこしをかし。尾だになからましかば、まいて。(三七二頁)

Bは星空を景物として眺める例であるが、七月七日についての記述である。年中行事としての七夕に限定されている点に注意したい。Cも特定の星を列記する記事である。類例に「名おそろしきもの」段に「ほこ星」（二七四頁）の名が見える。

清少納言は星を景物として捉える意識を持っていたようであるが、それはあくまで行事や特定の星に関わる限定的なものだったといえそうである⁶⁾。

つぎに『源氏物語』だが、特に注目すべき二場面をまず挙げる。

D『源氏物語』末摘花巻

……宵過ぐるまで待たるる月の心もとなきに、星の光ばかりさやけく、松の梢吹く風の音心細くて、いにしへのこと語り出でてうち泣きなどしたまふ。いとよきを取りかなと思ひて、御消息や聞こえつらむ、例のいと忍びておはしたり。月やうやう出でて……

①二七九～二八〇頁

E『源氏物語』浮舟巻

雪にはかに降り乱れ、風などはげしければ、御遊びとくやみぬ。この宮の御宿直所に人々参りたまふ。物まありなどしてうちやすみたまへり。大将、人にもものたまはむとて、すこし端近く出でたまへるに、雪のやうやう積

もるが星の光におぼおぼしきを、「闇はあやなし」とおぼゆる匂ひありさま……
(⑥一四七頁)

Dは末摘花と大輔の命婦が語らう場面であり、月が出ておらず「星の光」が明るいとある。Eは宮中の宿直所で薫が浮舟を思慕する場面で、こちらは「星の光」により雪がおぼるげとある。

いずれも一般的な星空の描写としてほぼ初例といえるだろう。先行例としては『日本書紀』の「星辰壞より漏りて」（仁徳天皇②三三頁）や『万葉集』の「ほしのはやし」（旧一〇六八）が挙げられる程度である。

ただ、DもEもいわゆる「つなぎ」にあたる場面であることには注意したい。Dは光源氏が訪れる前の会話場面であり、ほどなく到着すると「月やうやう出でて」と星が描かれなくなる。Eも浮舟を思慕する薫とそれを見て焦燥する句宮の場面である。雪と星の取り合わせが薫の美質と響き合うと見なせるが、一連の浮舟物語においては幕間の感がある⁷⁾。『源氏物語』は星を描写するが、鑑賞や賞美に類する意識は明確でないようだ。

しかしまた一方で、「星の光」という言い回しには注目される。『源氏物語』では他に、七夕に関わる表現として「大空の星の光を盞に映したる心地」（蓬生巻②三二六頁）⁸⁾、「彦星の光をこそ待ち出でぬ」（総角巻⑤二二九頁）、「彦星の光

をこそ待ちつけさせぬ」（東屋巻⑥五四頁）の三例、天文変異に関わる表現として「雨の脚しめり、星の光も見ゆるに」

（明石巻②二二七頁）、一例に違へる月日星の光見え」（薄雲巻③四四三頁）、「空の月星を動かし」（若菜下巻④一九八頁）の三例が見える。若菜下巻の用例以外が「星の光」である。これらは特定の天体や天文を指すが、「星の光」という本文表現を用いる点でD・Eと共通する。他に保坂本の浮舟巻にも「星の光」が一例確認できるため、次節で詳しく触れる。

管見の限り、先行する用例は『忠岑集』八七番左注「……波の堰なかるべし、天つ空よりも清く晴れて、星の光、雲の塵もみざりけん……」のみである。『忠岑集』から『源氏物語』への影響はやや想定しがたいが、いずれにせよ『源氏物語』が星の「光」にこだわっていることは論を俟たない。『源氏物語』において星は、光を放つという側面が強調されている。

以上、『枕草子』『源氏物語』を確認した。『枕草子』は星に対する意識がうかがえるものの、七夕等の限定的な視点のみであること、『源氏物語』は星を描く場面が見受けられるが、賞美の意識は強くないこと、及び星の「光」という表現を多用することが確認できた。

星の光は場面描写の技法として発展性があつたためである。後冷泉朝の作品群に特に影響を与えたようである。

三 後冷泉朝の散文における星の光の展開

後冷泉朝の「星」は、複数の作品にわたり類似の場面描写が同時多発的に確認できる。犬養廉氏が指摘した「融和」「共有」という時代的な性格がまず想起されよう⁹⁾。これから星の用例群に関して、三つのパターンに分けて検討する。

一点目として「梅雨時の宮中で男君が演奏する」という場面を挙げる。

F 『逢坂越えぬ権中納言』

「内裏に、御遊び始まるを、ただ今、参らせたまへ」として、蔵人少将参りたまへり。（中略）琴・笛など取り散らして、調べまうけて待たせたまふなりけり。ほどなき月も雲がくれぬるを、星の光に、遊ばせたまふ。このかたつきなき殿上人などは、ねぶたげにうちあくびつつ、すさまじげなるぞわりなき。（四三二〜四三三頁）

G 『狭衣物語』巻一

内裏には、わざと節会などのなき夜のつれづれなるに、雨雲隙なき空のけしき、ものむつかしさの慰めに、東宮渡らせたまひて、御物語などあるなりけり。（中略）稲妻のたびたびして、雲のたたずまひ例ならぬを、神の鳴るべきにやと※見ゆるを、※星の光ども、月に異ならず

輝きわたりつつ、御笛の同じ声に、さまざまの物の音ども空に聞こえて、楽の音いとおもしろし。

(①三七〜四三頁)

※見ゆるをーみるに空いたうはれてほしいとあかくなりぬ

(蓮空本・四季本等) 星のゝわたりつつーナシ(為家本・

前田本)

Fは宮中で待望されていた中納言が、ようやく到着して演奏する場面である。「星の光に、遊ばせ」とは、星明かりのもとでという意であろう。Gは御前で再三にわたる催促を受けた狭衣が、ついに吹笛する場面である。「月に異ならず」とは、天文異変による異例の星明かりである。

この二場面はよく類似している。共通点として、帝達の覚えめでたい優美な男君という設定や、梅雨時なので月が雲に隠れているという設定が特に挙げられる。これらを前節の『源氏物語』と比較すると、人物造型や場面設定とより結びついた場面描写であることがわかる。なおFは裸子内親王家女房の小式部、Gは同家女房の宣旨が作者とされる。ま

ず影響関係を想定すべきだろう。

反対に相違点として、Gのみ『うつほ物語』の天変地異を継承していることが挙げられる。ただ、『うつほ物語』は七夕や仲秋の場面であり、月が星と必ずセットで描写されていた。これに対しGは、月が雲に隠れて星のみが見えるとい

う描写になっている。やはり後冷泉朝において、星を表現に利用する意識が発展しているといえそうである。

二点目として「男君と女君が出会う」という場面を挙げる。

H 『狭衣物語』巻四

月はなけれど、星の光けざやかなるに、^{*}軒近うて、いたうたどしきほどにもあらねば、おほかたの御様体、うち振舞ひたまへるさまなども、ふと、あなめでたと見たまへるに、風に従ひてくゆり入りたる句ひさへ……(中略)「……今宵も月も待たずいそぎはべりて……」

(②二七二頁〜二七三頁)

※軒近うて、いたうたどしきーいとうあ〜しき(伝為明

筆本)ー軒ちかうているはこと〜しき(伝慈鎮筆本)

I 『狭衣物語』巻四

思ひも寄らずうち見返りたまへるに、星月夜の^{*}たどたどしきに、烏帽子の^{**}きと見えたるに、心惑ひしたまひて、やがてうつぶしたまひて、音もしたまはぬを……(中略)「……月待つほど、かうて侍らん」とぞのたまふ。

(②二七八〜二八〇頁)

※たどたどしきにー光に(飛鳥井雅章筆本) きとーふと(諸

本)

J 『更級日記』

とみに立つべくもあらぬほど、星の光だに見えず暗きに、うちしぐれつつ、木の葉にかかる音のをかしきを、「なかなか艶にをかしき夜かな。月の隈なく明からむもはしたなくまばゆかりぬべかりけり」(三三四頁) H・Iは物語の終盤、狭衣が宰相の妹(後の藤壺女御)を訪ねる場面である。Hでは狭衣の優美な容姿が「けざやかな」星の光で見えるとあり、Iでは「たどたどしき」星月夜の明かりで狭衣の烏帽子が見えたとある。「月待つほど」というセリフから、「星月夜」が星のみの空を表す語であると理解される。

先ほどのF・Gの用例と併せ、月が出ていない星のみの空という情景がこの時代に幾度も描かれていることがわかる。月の不在は『源氏物語』のD「宵過ぐるまで待たるる月」も同様だが、Dは末摘花と大輔の命婦の会話場面であった。

『源氏物語』からの影響があるにせよ、星夜の情景は後冷泉朝において男君の美質と結び付き、男女の邂逅の場面に利用されている。これは後冷泉朝において明確に打ち出された嗜好といえるのではないか。先行研究では、倉田実氏が『狭衣物語』の灯と月の明かりを論じる過程で星の光の用法に触れる¹⁰⁾。卓見であるが、後冷泉朝の作品群という視座からさらに星を捉えたい。

Jも、菅原孝標女と同僚女房が源資通に邂逅する場面である。女房である女君のもとを思慮深い男君が訪ねるという設定が、『源氏物語』の薫及び『紫式部日記』の頼通に通じるという指摘はあるが¹¹⁾、それらはいずれも夕暮である。Jが「星の光だに見えずくらき」と異なる情景になっている点は看過できない。

Jは暗夜であり、星は出てない。しかし「星の光すら見えない」という発想は、星が既に景物として認識されていないが成立しないのではないか。Jは景物としての星の描写をさらに推し進める、ないしは逆手に取る表現なのではないか。なお藤昌嘉氏は保坂本『源氏物語』手習巻の「ほしのひかりたにみえさりしに」という本文を指摘し、Jの場面も含め「彦星の光」をめぐる一連の表現の問題として論じる¹²⁾。保坂本の本文と、御物本『更級日記』の本文と、成立の先後関係は詳らかでないが留意すべき点である。

三点目として「贈答詠の場面描写」を挙げる。

K『更級日記』

冬になりて、月なく雪も降らずながら、星の光に、空さすがに限なく、さえわたりたる夜のかぎり、殿の御方にさぶらふ人々と物語し明かしつつ、明くればたち別れしつつ、まかでしを思ひ出でければ、

月もなく花も見ざりし冬の夜にしみて恋しき
やなど

われもさ思ふことなるを、同じ心なるもをかして、

さえし夜の氷の袖にまだとけで冬の夜ながら音を

こそは泣け (三三一～三三二頁)

Kは、出仕先で他家の女房達と語り合い、その時の思い出を贈答した記事である。星の光で限なくさえていたとあるから、寒さよりもむしろ明るさのニュアンスが強いだろう。

注目すべきは、地の文には「星の光」とあるのに、和歌に星が詠み込まれていない点である。先方の贈歌は「月もなく花も見ざりし」と月の不在を詠み、孝標女の返歌は「さえし夜」「氷」「とけで」と冷え冷えとした情景を詠む。これは、

この時代の星の「光」に関する描写が、韻文に先立ち散文で成立したことの徴証と見なせるのではないか。この見通しに関して、次節で和歌の用例を通覧する。

以上、本節で確認した後冷泉朝の用例を改めて考察する。優美な男君の管絃の場面と、男女の出会いの場面と、贈答歌の場面と、三つに分けて検討した。いずれも星の光が効果的に用いられ、場面描写に利用されていたことがわかった。

さらに、これらは天の川や明星のような見上げて鑑賞される天体ではなく、登場人物や辺りを照らし出す星明かりとして描かれていたことが注目される。「星の光」という言

い回し自体は『源氏物語』からの影響であろうが、表現内容はより発展している。星が照らすという発想は、他の七夕関連の用例や、次節で見る和歌の用例と決定的に異なる点である。あえて挙げれば『日本書紀』の「星辰壞より漏りて、床・蓐を露にす」(仁徳天皇②三三頁)があるが、内容は似つかない。

またH「けざやか」等の強い光と、I「たどたどしき」等の弱い光とが併存していることも注目される。星の光の強弱の別は『源氏物語』にも見えたが、J「星の光だに見えず」の不在も含め、星の光には多面性があることにも付言しておきたい。

四 後冷泉朝までの和歌と見上げる天体

後冷泉朝までの和歌における星を見る。前節の散文の用法と比較することを念頭におく。なお後続の院政期以後の和歌は、君嶋重紀氏や久保田淳氏が論じているが¹⁴⁾、詠みぶりに変化がみられる。稿者も別稿を期したい。

平安期の星の用例は、七夕関連の歌材や歌語を除くとそこまで多くない。調査の結果、ある程度の修辞のパターンが確認できた。そのためデータとしての価値も考慮し、以下、煩雑だがパターンごとに初例の一首を掲げ、類歌情報を次

行の（ ）内に列記する。比喩や掛詞等、位相の異なるカテゴリーを挙げたが、複数のパターンにまたがると判断した歌は重複して掲出した。

● 菊の比喩

大虚緒取反輻聞那国星敷砥見留秋之菊飽／オホゾラヲ
トリカヘストモキカナクニホシカトミユルアキノキク
カナ
〔新撰万葉集〕三三九

〔古今集〕二六九／『古今六帖』三七五八／『元輔集』
一四／『安法法師集』六五／『長能集』一八／『大斎
院御集』四八／『康資王母集』二九／『弁乳母集』四
八・四九

● 灯の比喩

晴るる夜の星か川辺の蛩かも我が住むかたにあまのた
く火か
〔業平集〕七二

〔古今六帖〕一六四一／『拾遺抄』四八三／『能宣集』
九四／『兼澄集』七〇／『高遠集』三〇八

● 蛩の比喩

晴るる夜の星か川辺の蛩かも我が住むかたにあまのた
く火か
〔業平集〕七二

〔拾遺集〕四〇九／『後拾遺集』二二七／『高遠集』
三〇七／『大斎院前御集』一三二／『花山院歌合』九・
一〇

● 橘の比喩

五月闇雲まばかりの星かとして花橘に目をぞつけつる
〔好忠集〕一三八六

● 秋草の比喩

大空をとりかへすとも見えなくに星かと見ゆる秋の草
かな
〔寛平御時后宮歌合〕九三三

● 白髪 of 比喩

年を経て星を戴く黒髪の人より霜になるぞかなしき
〔能宣集〕二九七

● 「欲し」の掛詞

あひ見まく星は数なくありながら人に月なみ迷ひこそ
すれ
〔古今集〕一〇二九

〔古今六帖〕三七二・三七八／『躬恒集』六二／『実
方集』二七一／『弁乳母集』四八

● 「干し」の掛詞

大空にふりて濡るらん濡れ衣をほしもわびぬるころの
ながめか
〔元真集〕四二

● 星に寄する恋

日暮るれば山の端に出づる夕つづのほしとは見れどあ
はぬころかな
〔古今六帖〕三七二

〔古今六帖〕三七三・三七八／『朝光集』四四

● 多数の例え

あひ見まく星は数なくありながら人に月なみ迷ひこそ
すれ

『古今集』一〇二九

『古今六帖』三七三／『後拾遺集』七九七／『長能集』
三四)

●夜の証

久方の空なる星にたぐはずは昼とぞ見まし秋の夜の月

『江帥集』一〇〇)

『丹後守公基朝臣歌合』四)

●その他

天つ星道も宿りもありながらそらにうきてもおもほゆるかな

『拾遺集』四七九)

朝夕にあふぎておかむかひありて空なる星もあはれと

『経信集』二五八)

影見しは天つ星なりしかりとて沈む藻屑を照らすとは

なし

五月闇天つ星だに出でぬ夜は照射のみこそ山に見えけ

れ

水もほし天つ星をも宿しつつのどけからせよ谷川の底

『相模集』三〇七)

差しかはる星の迷ひに果てぬべき我が身にすはる罪ぞ
かなしき

『主殿集』八〇)

「その他」の中には解釈が難解なものもあるが⁴⁴、いずれも前節まで見てきた散文の用例と大きく異なる点がある。それは、散文が星の光、ないし照らす星を積極的に描写するのに対し、和歌の星はあくまで見上げる天体を描写する点である。例外的に『長能集』一八が「星が藻屑を照らさない」と詠んでいるが、これは題「水辺白菊」詠であり、菊の比喩である。

つぎに、家集中の短連歌から、七夕以外で貴族達が星を賞美した二例を挙げる。

L 『小大君集』四〇

天上人、桂より舟にて渡るに、星の影の見えければ、
右衛門督公任の君

水底に映れる星の影見れば

実方

天のと渡る心地こそすれ

M 『大斎院御集』一三二

同じ月廿三日、暗きに、東の戸押し開けて、おほいなる星の出でたるを見て、あれは何ぞとおどろけ

ば、中将、月しろなるべしといへば、中務

出でぬまの月しろに見む天つ星^{本無中将}

小大輔

有明までの雲隠れする

しは藤原公任と藤原実方が川に映る星を詠んだものである。七夕の天の川や『万葉集』「ほしのはやし」（旧一〇六八）以来の、水辺と星の取り合わせである。詞書と上の句に「星の影」「見え」「見れ」とあるのは、星明かりでなく水に映った星を指すのだろう。Mは大斎院選子の女房達が大きな星を月の代役と見なす詠である。月の不在という状況は散文でも『源氏物語』以後にあるが、「天つ星」として星を仰ぎ見る姿勢は和歌の用法である。

平安期において星は景物として一般的でなかった一方で、右のように鑑賞される事例も確認できた。類例として、先に掲げた歌群では『高遠集』三〇七・三〇八の詞書が「簾」ごしに空の星を見て」とあり、実際に星を鑑賞した上で螢と灯の比喻を詠んでいる。これらにはあくまで偶発的な行為のようだが、平安期の星に関する資料として貴重である。

しかしながら、これら鑑賞の事例も前節までの散文における星の在り方とは共通性を見出しがたく、文芸的な性質は他の和歌の用例と類似する。院政期以後は和歌にも星の光の用例が複数見えるようになるが¹⁰⁾、後冷泉朝以前では、星において散文の用法と和歌の用法は、やはり原則として交わらないと考えるべきである。

以上、和歌における星を、全体的な修辞の傾向と、実際に鑑賞する事例という二方面から確認した。いずれも星を見

上げる天体として描写していることが、散文の星の光の用例群と大きく異なる点であった。加えて修辞としては比喻や掛詞が多いこと、鑑賞する事例は偶発的であることも確認できた。

五 漢籍における星

最後に、漢籍における星の用例を概観する。漢籍は枚挙に遑がなく、かつ用例数も多い。主要な作品に対象を絞らざるをえない点、諒とされたい。ただ、漢籍の星も和歌と同様に、景物としての用例は多くないようである。

まず本朝の漢籍を見る。「星霜」等も含め機械的に「星」の用例数を調査した結果、『懐風藻』六例、『凌雲集』五例、『文華秀麗集』八例、『経国集』二四例、『菅家文章・後集』四六例、『新撰万葉集』七例、『和漢朗詠集』四例、『本朝麗藻』七例、『本朝文粹』六八例となった¹¹⁾。なお天子の比喻である「北辰」〔『懐風藻』四二〕等も星の用例と見なせるが、線引きが困難になるためあくまで「星」字の用例に限った。すべてを掲げえないが、用例の傾向としては七夕や刻限を表すものが多い。他には天文的な星座や運行を表す「星廻」

〔『菅家後集』六四二〕等や、比喻も含め人を表す「使星」〔『文華秀麗集』一九〕等の用例群が比較的多く確認できた。

本稿で問題にしている星の光という観点から個別の用例に目を向けると、検討すべきものは少ない。管見では「星燦翠烟心」(『懷風藻』五七)という春日宴の戸外の様子と、「曉燭半残星色盡」(『経国集』七言奉和除夜一首)という明け方の星明かりが消える様子が特に挙げられる。他に「舎低應道星穿壁」(『菅家文草』二二一)は灯を星明かりに喩え、「眼懸星耀」(『本朝文粹』三六〇)は馬の目を星の輝きに喩えている。

また成句「星光」も複数確認でき、「列星光於煙幕」(『懷風藻』五二)、「鶉驚遙似落星光」(『凌雲集』奉和春日遊獵日暮宿江頭亭子応製)、「星光織姬愁」(『文華秀麗集』八八)、「漢浦星光缺」(同九〇)、「風情潤色使星光」(『菅家文草』一〇四)の五例見える。それぞれ、食器を靄ごしの星明かりに喩えた表現、鳥影を流星に喩えた表現、挽歌において織姫星が死を悼む表現、挽歌において天の川の光が失われるという表現、渤海大使を称賛する表現である。これらを見るに、和歌と違い、星の光に関する表現が存在するといえるが、後冷泉朝の仮名散文のような、星が照らすという構図までは確認できないようである。

最後に中国の漢籍だが、星が照らすという漢詩が一例確認でき、注目される。

N 『芸文類聚』星

晋傅玄衆星詩曰(中略)又詩曰東方大明星、光景照千里、少年捨家遊、思心晝夜起。
天文異変でもないのに「星が千里を照らす」という描写は、仮名散文の星の光の用例に通じる。『芸文類聚』は早く『日本国見在書目録』に書名が見える。紫式部や他の女房達が披見し、星の光の表現の参考としたのだろうか。

漢詩が仮名文芸に影響を与えた例として、近いものでは菊を星に喩える表現や、菊と水辺を取り合わせる表現等^初が指摘されており、いずれも『芸文類聚』所載の用例も関わっている。ただ、この二つは本朝の漢詩や和歌に広く浸透した事例である。対して、星が照らすという発想や表現は、前述の通り本朝では和歌の用例に確認できず、漢詩の用例では星自体の光が確認できるのみであった。ちなみに『初学記』「星」項にも類例は確認できず、『白氏文集』の「星」の用例も通覧したが類例は同様に確認できなかった。

Nの「東方大明星、光景照千里」もしくはこれに類する詩句が仮名文芸に影響を与えた可能性は、否定できないものの右の理由からやや消極的な立場を取らざるをえない。

以上、漢籍における星の用例を、必要に応じて引用し確認した。本朝の漢籍では星の光に関する用例がいくつか確認でき、『芸文類聚』では大きな明星が千里を照らすという詩句が確認できた。漢籍における星の光の用例は看過できな

いものである。ただ、仮名文芸への影響はただちに想定できるものではなく、後冷泉朝の散文における「星の光」が独自の修辭を展開していたことが改めて推察された。

六 まとめ

本稿では、上代から一一世紀後半の後冷泉朝までの「星」を通覧し、その用法を論じた。特に後冷泉朝の散文作品群に注目した。

『源氏物語』に反復使用された「星の光」を端緒として、ほぼ子世代にあたる『逢坂越えぬ権中納言』『狭衣物語』『更級日記』といった作品群が、辺りを照らす星明かりという景物を打ち出したことが確認できた。また和歌では、見上げる天体や比喩としての星が詠まれること、漢籍では、比喩や修飾の他に星の光に関するいくつかの用例があることも確認できた。これらを考え併せて、散文における照らす星、ないし星明かりという用法が特徴的なものであると推察された。ただし各所で触れたように、『忠岑集』の「星の光」や『芸文類聚』の「東方大明星」等、さらなる検討を要するとおぼしい例もある。同様に、天文や七夕も含め、星の表現史をより総合的に捉える必要もありそうである。文芸における星

の研究は、いまだ問題が山積している。建礼門院右京大夫という大きな歌人を越えて、星の表現史を改めて見直したい。

※引用本文は基本的に新編日本古典文学全集に依ったが、歌集は新編国歌大観に、『懐風藻』『文華秀麗集』『菅家文草・後集』は日本古典文学大系に、『凌雲集』『経国集』は国民図書株式会社、日本の日本文学大系に、『本朝文粹』は新日本古典文学大系に、『芸文類聚』は新興書局の一九六七年発行版にそれぞれ依り、和歌の仮名表記等を適宜改めた。『源氏物語』保坂本は伊井春樹編『保坂本源氏物語』（おうふう、一九九七年）をもとに翻刻し、『狭衣物語』巻四の異同は狭衣物語諸本集成に依った。

注

- (1) 例えば天文は竹内正彦「須磨の星、海からの使者」『源氏物語』と星辰信仰・序説』（『王朝文学史稿』第一九号、一九九四年二月）、伊藤禎子『うつほ物語』共鳴と星の閃き』（鈴木健一編『天空の文学史 太陽・月・星』三弥井書店、二〇一四年）、七夕は仁平道明「月の別れと星の別れ」『竹取物語』の構造についての試論』（『源氏物語とその前後4』新典社、一九九三年五月）、福留温子「二星相逢—八代集の七夕歌—」（鈴木健一編『天空の文学史 太陽・月・星』三弥井書店、二〇一四年）等。

(2) 新村出「星月夜」「星夜讀美の女性歌人」（『南蠻更紗』改造社、

一九二四年)、久保田淳「建礼門院右京大夫集評釈・二五 星月夜」(『国文学―解釈と教材の研究―』第一五卷第一六号、一九七〇年二月)、君嶋亜紀『建礼門院右京大夫集』の描いた星(鈴木健二編『天空の文学史 太陽・月・星』三弥井書店、二〇一四年)等。

(3)和田律子『藤原頼通の文化世界と更級日記』(新典社、二〇〇八年)、井上新子『提中納言物語の言語空間 織りなされる言葉と時代』(翰林書房、二〇一六年)等。

(4)ちなみに前掲(1)伊藤論文は合奏と星を結び付けて考察する。

(5)例えば和田律子「藤原頼通文化世界における『枕草子』撰取の一样相―『更級日記』を中心に―」(『古代中世文学論考』第二九集、二〇一四年四月)、土岐武治『狭衣物語の研究』(風間書房、一九八二年)等。

(6)先行研究には、星辰信仰を論じた滝口小百合「清少納言と紫式部の『星』に関する意識の違いについての雑考」(『枕草子』を中心に)、『枕草子探求』第四輯、一九八三年)や、『和名類聚抄』と比較検討した勝保隆「枕草子の星」(『アジア遊学』No. 二二三、二〇〇一年一月)がある。

(7)薫と雪景の取り合わせは、大君の死を悼む場面「雪のかきくらし降る日(中略)十二月の月夜の曇りなくさし出でたる」(総角卷⑤三三三二頁)もあるが、こちらは月である。

(8)蓬生巻の用例に関しては高田信敬「蓬生箋註―盥と袂―」(『鶴見大学紀要(国語・国文学)』第二二号、一九八五年三月)に

詳しい。

(9)犬養廉「撰関時代後期の文学潮流―後冷泉朝文壇への証明―」(『国文学解釈と鑑賞』第二八卷第一号、一九六三年一月)。

(10)倉田実「狭衣物語の灯影と月影」(『論叢狭衣物語1 本文と表現』新典社、二〇〇〇年)。

(11)和田律子「宮仕への記―物語の男君―」(『藤原頼通の文化世界と更級日記』新典社、二〇〇八年)等。

(12)加藤昌嘉「星と浮舟」(『揺れ動く『源氏物語』』勉誠出版、二〇一一年)。加藤氏は『小夜衣』と『浜松中納言物語』の「彦星の光」にも触れるが、いずれも男女の逢瀬の意なので本稿では割愛した。

(13)久保田淳「星の光をいうことば」(『日本語学』第二四卷第九号、二〇〇五年八月)、前掲(2)君嶋論文。

(14)『相模集』三〇七の「水もほし」は武内はる恵・林マリヤ・吉田ミズズ『相模集全釈』(風間書房、一九九一年)が「みつのほし」の本文を採り星位の意と注し、『主殿集』八〇の「星の迷ひ」は久保木寿子『四条宮主殿集新注』(青簡舎、二〇一一年)が星が多数すぎて判別できない意かと注する。

(15)例えば「しかすがに昼はまばゆし雲の上の花は夜見よ星の光に」(『頼政集』五三〇)等。前掲(2)君嶋論文や前掲(13)久保田論文に詳しい。

(16)管見では『菅家文章・後集』の星の用例のみ川上ふたみ「道真漢詩における「星」」(『解釈』第三二卷第七号、一九八六年七

月)に整理されている。

(17)北山円正『菊花の詩と和歌―経国集から古今集へ―』(『国文学論叢』第三〇輯、一九八五年三月)、柳澤良一『久安百首』における藤原俊成の漢詩文撰取歌について(『国語と国文学』第六三卷第一〇号、一九八六年一〇月)等に詳しい。

(付記)本稿は第六七回高知大学国語国文学会研究発表会(二〇一八年二月一日、於高知大学)での口頭発表に加筆を加えたものです。発表及び成稿に際して、御意見・御教示を頂いた方々に厚く御礼申し上げます。

(おおつか・せいや 本学講師)